

TS（トータル・サティスファクション）を目指して MI7

「叱る」依存について

校長室担当

子どもが好ましくない行動をとった時に、「どうして叱らないのか」「甘やかしているからあんな行動をとるんだ」「叱らないから舐められるんだ」と周囲の大人をとがめたり、叱らない大人に対して「怒り」すら感じるという大人もいます。まさに「叱る」依存の症状です。臨床心理士の村中直人さんはその著書の中でこう指摘しておられます。

「叱る」という行為の本質は叱られる人のネガティブ感情による反応を利用することで、相手を思い通りのコントロールしようとする行為なのです。叱られた子どもの防御システムが活性化されると、戦うか逃げるか、どちらかの行動が起こります。叱る人は権力者なので、逃げるが多くなるでしょう。……中略……子どもたちはその場を取り繕うために「言うことを聞く」「謝罪の言葉を述べる」などの方法で逃げます。そしてこのことが、叱る側に「叱ることは有効である」という勘違いを引き起こすのです。

自分が強く叱責することで、目の前の人の行動が変わる。それが単なる逃避行動でしかないことを知らなければ、「叱れば人は学ぶ」と勘違いしても無理のないことでしょう。しかしながらそのとき、叱られた人の前頭前野は活動が低下しています。自分がなぜ叱られているのかを冷静に理解し今後のために自らの行動を顧みることができない状況です。（『「叱れば人は育つ」は幻想』PHP 新書 より）

「叱る」ことを絶対的に否定はしません。実は「叱る」という言葉の定義の問題かもしれません。ただ、毅然としていようが、感情的だろうが、冷静だろうが、「叱る」行為に相手をコントロールしようとする姿勢が見えたら、それは子どもにとっては戦いになってしまうのです。「叱る」側に立つ私たち大人にできることは、まず第一に子どもから信頼される人間であること。そして、相手に自己決定させる対話を行うこと。その上で、「対等のパートナーとしてできることはないか」を問いかけ、自己解決の支援をすること。これが「叱る」の定義であれば、依存もありかもしれませんね。（令和7年5月9日）